

職場における自分や物

大西 淳子

歌人以外の顔を持ち、働いている歌人は少くない。

田村元はサラリーマン。平明な言葉と無理のない韻律で、積極的にサラリーマンであるわれを詠い、多くの読者の心をつかんでいる。私もサラリーマンとして、心をつかまれている一人だ。

パソコンとわれと一日を向き合ひてわれのみが礼をして帰^{かへ}りゆく

田村元『昼の月』

サラリーマンのわれから歌を詠むわれへ
伝言メモのふりをしたメモ

音だけは楽しいビボットテーブルで月次の数字まとめ上げゆく

デイスカッション佳境に至りアルプスの天然水が汗かきてをり

二時間のサンドバッグに耐へてのち路地裏の白き暖簾をくぐる

いずれも、日常業務のなかで見覚えのある場面だ。私などは立ち止まることなく通り過ぎていたが、歌集を読み「確かに！」と膝を打ったのち、心の深い部分で味わった。田村

は、意識下にあるような小さな心の起伏を、言語化することに長けている。

一首目。パソコンは、言わば相棒。しかし礼をするのはわれのみ。感情を持たないパソコンと、社会秩序を保ち、人間関係を円滑に維持しながら働くわれとの対比が「礼」の一言で鮮やかに表現されている。

二首目。職場で歌の断片が浮かんだのだろう。あからさまに作歌するわけにはいかなかったが、忘れないようにメモだけはしておきたい。そんな時は、伝言メモに書いておき、退社する時そっと持ち帰る。「ふりをした」が抜群にいい。このメモは、サラリーマンのふりをした歌人そのものだ。

三首目。ビボットテーブルは、膨大なデータを集計したり、分析したりするエクセルの機能。私もよく使うが、音が楽しいなどと考えたことがなかった。破裂音や促音が入っており、作業内容を考えなければ確かに楽しい。「音だけは楽しい」と限定したことで、大変な業務であることが伝わる。

四首目。議論の白熱ぶりが、ベツトボトル

の水の描写により表現されている。ボトルの汗は、水がぬるくなった結果であるが、人間の汗のように、じっとり熱く感じられる。議論に没頭するサラリーマンの視点では気づかないような細部に着目し、歌人のまなざしでよく観察している。

五首目。「サンドバッグ」がサラリーマンの姿を的確に捉えている。何を言われても、決して反撃したり、かわしたりせず、すべて受け止める。この行き場のないストレスは、酒で発散されることになる。

インターネットが急速に普及し、SNSが身近なものになったことから、簡単に世界に向けて情報発信（情報漏洩）できてしまう時代となった。一般的に、さまざまな職務に守秘義務があり、二〇〇〇年以降、コンプライアンスという言葉がしきりに叫ばれるようになった。短歌は、作中主体イコール作者と読まれることがいまだに多く、職業詠が詠いにくくなっていると思う。

今回引いた歌は、職場における他者を詠むのではなく、職場における自分、あるいは物を詠むことで、その職務の大変さや職場の臨場感を伝えることができている。

生きるための労働。その生の歌は、時代が変わっても大切に詠み続けていきたい。